

魔剣物語外伝 英雄ではない者の話

凡人エルフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは魔剣を巡る英雄達の物語の傍にいた、歴史に残らない者達の話。

※このシリーズはやる夫スレ『魔剣物語』原作者のエイワス様に許可を頂いて投稿しております。

矛盾に関しましては剪定事象という事で流してくださると幸いです。

4	3	2	1
29	15	7	1

目
次

俺の目から見たウイリアム・マサチューセッツの事を一言でまとめるなら『理解不能な奴』だった。

最初に会った時、何をそんなに焦っているのだろうかと思った。こんな乾いた戦争で死にたくないから頑張ってるのか、と考えていた。妻がハーフの病弱な女性がいたと聞いたから、色恋沙汰が理由かと思えば全く見当違いな事さえ考えていたぐらいだ。

だっていくら人間達が凄いといっても、寿命ならば俺達の方がずっと上なのは良く知っていた。だから英雄がどれだけいようと、俺達が生きていれば寿命の違いで俺達が勝つからそれまで皆を守りきればいいだけだと思込んでいた。

けれどもそれは違うのだとウイリアムと話していて、漸く理解した。

「何でそんな焦って頑張ろうとするんだ？ 人間と俺達の寿命は全く違う。人間達が死ぬのを待てば、俺達はそれで勝ちじゃないか」

「その死ぬまでとやらの、人類最強アリーシャ・デイフダ」や「無敗將軍ペンドラゴン」以上の怪物が生まれぬ保証はどこにある？」

「……………」

本人曰く毎回誰もが黙る同じ答えを出されて、俺もまた例外なく言い返す事ができなかった。

帝国はもちろんだが、様々な人間の国にはそれぞれ英雄がいるのは俺も流石に知っていた。そいつらが万が一こちらに剣を向けてきたらエルフの勝ち目が薄いというか無いのも分かっていた。そうなたら俺は全力で戦う気にいるけれど、守りきる自信は全く湧いてくれなかった。

だから恐らくエルフの中で一番人間に対する危機感があるだろう彼についていけば、怪物達から皆を守れるんじゃないかと思って俺は彼の下につく事にした。

それからは色々大変だった。心底大変だった。

乾いた戦争中だというのに呑気な思考をしていた俺にとって、ウイ

リアムが王になってからは目まぐるしい日々だった。

武芸者だった父から数多の武器を教え込まれていた俺は、側近の魔女とまでは行かなくても相当使われた。剣とか弓とか爆弾とかその他諸々全部使わされたって言い切れるぐらいには他の奴よりかは多く戦ってきた。いざという時、家族や友達を守るかもしれないから覚えておこうと思った技術を全て活用できたのは誇らしかったがその反面、使う時のタイミングが中々えぐい時が多かったので複雑な気分になる事も多かった。

けど戦う事以外で頭を使うのは苦手な俺は、彼を信じて戦えばエルフは大丈夫なんだと信じて戦い続けた。相手が大物だとしても、俺達エルフにも英雄がいるのだと思えば勇気が湧いてきたから頑張れた。ただ、この時の俺がやってしまった失敗は間違いなく一つあった。エルフの英雄になったウイリアム・マサチューセツツは、俺達が思っているよりもずっとずっとエルフラしくないエルフという事を忘れてしまっていた事だ。

突如現れ、帝国と多くの英雄を滅ぼした復讐騎……いや、魔王との決戦中、俺は生まれて初めて現実というのを疑った。

ウイリアムが復讐騎から魔剣を奪い取り、第二の魔王となった。

これだけで「何やってんの、あいつ?! 馬鹿なの!?! ウイリアムなの!?!」と人生最大最高レベルで心臓飛び出す勢いで驚いたというのに、あの男は復讐騎のようにはならなかったからもっと驚いた。部下に頬を掴ってもらったけど、他の傷の痛くてあんまり分からなかった。

もし同じようになっちゃってしまっていたらエルフの英雄の変貌に耐え切れず、俺の心はその瞬間折れていただろう。だけど同時になっちゃっていた方がまだマシだったのかもしれないとも思った。そう考えちゃうには十分な戦乱が、少なくとも百年は続いてしまったから。それでも俺は戦った。エルフ達の境遇は過去に比べればマシになっちゃったのは事実で、ウイリアムがエルフの為に頑張っている事だけは辛うじて俺も理解していた。だから今後も戦い続けていけば、エルフ達の幸せはあるんだと信じて、またやれる事をやり続けていっ

た。

俺達エルフの方が寿命は長い。

魔剣のおかげで俺達は昔よりもずっと強くなった。

怪物達の半分以上は復讐騎のおかげで死んだから、殺される心配も相当減った。

だから後は終わるまで皆を守り通せばいい。

そう自分に言い聞かせて、武器を奮ってきた。だけでも長生きの筈のエルフだというのに俺は、終わりが見えなかった。

ある日、その終わりがただの妄想でしかない事を俺は知る。

部下達が捕まえた人間の女一人に……乱暴をしているのを見つけ、見るに見かねて止めた時の事だ。

言葉にしたいくない程に無残に穢されてしまった女は従属した国の者。どうやって手に入れたと部下に聞いたら、その国から買った、という酷い理由だった。自分達の方が偉いから、という理由にすらならない動機を言われた時は頭が痛かった。当然そいつ等は滅給、被害者の女は俺が引き取って世話をする事にした。そのぐらいはやらないと女があまりにも可哀想だった。

だけど女は俺が隙を見せた時、俺の武器を奪って殺しにかかってきた。

昔に比べて強くなっていた俺にとっては簡単に防げるものだったから無傷で終わった。それでも女は半狂乱状態のまま、俺を憎悪していた。俺はこの時愚かにも理解できなくて「どうして殺そうとした」と尋ねてしまった。

女は、この時代に生きる者達にとってあまりに当たり前の返答をしてくれた。

「エルフ達さえいなければ、この世界はとっくに平和だったのに」

その呪詛で俺は漸くエルフは俺の守りたかったエルフではなくなっていた事に気づいた。

翌日、女を俺が一番信用できる人間の下に送ると俺は国を去った。

やばいと気づいた時にはすぐ動いて解決した方が良く、というのはあいつの下についてから良く分かったものだからこの時もそうした。

……魔剣を手に入れる前から長く仕えてきたから、ちよつとは引きとめられるかと思っていたのだがそんな事は全く無かった。あいつは「そうか」とあつさり許可を出したからこつちが拍子抜けした。魔王になってやばくなつたせいかと思つたけど、あまりに昔と変わらない様子だったから真意なんて分からなかつた。

その後、俺は少ない噂を頼りにハーフ達の隠れ里へと向かつた。そこにはウイリアムの下を去つた側近の魔女がいた。彼女もまたウイリアムについていけなくなり、国から去つていった人物だ。

特別親しいわけではないが顔を合わせた事があつた俺は彼女に里に住まわせてもらう許可を貰つた後、一つ質問をした。

「メデイア、一つ聞きたいんだけどいいかな」

「何かしら？」

「……ウイリアムはどんな国を作りたかつたんだ？」

あの男がエルフの為に頑張っている事は知っている。その為に何でもやってきた事も知っている。あいつは間違いなくエルフの英雄だと胸を張つて言える。

だけど俺はそれ以上の事を知らない。魔剣を手に取り、恐怖で世界を支配して、戦争を更に百年続けさせた事の真意を知らないまま戦つてきただけ。だから側近だった彼女なら、何か知ってるんじゃないかと聞いてみた。

俺の質問に彼女は何も答えられなかつた。

辛くて悲しそうな顔をした彼女を見た俺が謝罪したら、彼女は「あなたが謝る事ではない」と言つてくれた。その時の彼女を見た俺は何を言えばいいか分からなかつた。分かるとすれば、益々あの男の事が分からなくなつた事ぐらいだつた。

それからの俺は隠れ里の防衛に徹する生活を送つた。

相変わらず戦争の終わる気配は見えなかつたが、せめてここにいる連中だけでも守りたかつたのでやれる事はやる事にした。時間があがる間にやりまくる事のメリットについては、あいつのおかげで嫌というほど知っていたから。

若い連中に戦い方を教えてやったり、敵が来た時に備えて罫を仕掛

けたり、森の外を見回りにいったり、と慌しいけれども終わらない戦争をしてる時に比べればマシな日々だった。

久しぶりの緩やかな時を得られた俺は「これが求めていた俺の終わりなんだ」とやっと分かった。

エルフ全体の未来でもなく、世界の支配種族になる事でもなく、単に仲間達や子供達を怪物達がいなくなるまで守り通せばそれでよかったんだって。

けどウィリアムが全部間違っていた、とは言わない。あいつがいたからエルフ達はここまで来れた、あいつほどエルフの事を思っていた奴はいない。そう断言できるぐらいには、あいつはエルフの為に戦い続けている。

……一体あいつの考える終わりは何処にあるのだろうか。どうすれば乾いた戦乱はエルフの平和に変わるのだろうか。

疑問は浮かんだけど、ウィリアムの事を理解できない俺にそんなこと分かるわけがなかった。

分かるまでの時間なんてなかった。

分かる前に、三代目の魔王がやってきた。

俺は使える限りのものは人も武器も知恵も技術もとにかく全部使って、里に三代目魔王を近づけないように戦った。

ウィリアムを殺して魔剣を手に入れた復讐の女王の目的がエルフの絶滅なのは把握していた。だから俺はあえて最前線に出て、里に危害が及ぶのを少しでも遅らせようと立ち振る舞った。

だが無意味だった。魔剣が相手では、英雄ではないただの俺の攻撃など通じるわけがなかった。

気づいたらエルフの英雄が持っていたかの剣が俺の眼前に迫っていた。その時、俺の頭にこんな事が過ぎっていた。

——ここにいるのが俺じゃなくてウィリアムだったなら、里の連中を守りきれたのかな。

そんな妄想に答えは無く、三代目魔王の魔剣によって一人のしがな

いエルフの生涯は終わったのだった。

ウイリアムの印象は『理解不能な奴』から変わった事はほとんど無い。

戦争が終わったなら漸く見えるんじゃないだろうかと推測するしかないほど、あいつのエルフらしい姿を全く見ていないのも理由の一因だ。

だけど一つだけ理解不能ではない部分を知った。これを知った時、俺はちよつとだけ嬉しかった。理解不能じゃない部分を持つ英雄も俺と同じエルフなんだと思えたから。

その切欠になったのは一つの好奇心からだ。

エルフの英雄であるあいつの妻は同じエルフではなく病弱なハーフェルフ、しかもかなり人間に近い風貌だったのを見た時は驚いたものだ。

その奥さんの存在でハーフェルフ達が俺達の仲間になったから良い事とはいえど、あれだけエルフ達の未来を考えてる奴なら奥さんもエルフにするのが当たり前じゃないかと思っていた。友人達は一目惚れか好みの肉体だったか物好きだったんじゃないかと好き勝手に語っていて、俺も概ね同じ事しか思い浮かばなかった。

だが相手はウイリアムだ。エルフ同士でも本当にエルフかと疑うような、いや、疑うを通り越して理解が一切出来ない脳内思考と行動力を持つ我等が異端児な英雄なのだ。だから俺達が思い浮かぶような理由では決して無い、という事だけは理解できた。

なので、本人に尋ねる事にした。

当然ながらウイリアムからは望んだ答えが返ってこなかった為、もう一人の本人である奥さんを狙う。

幸いにも俺はある程度の信頼と地位は貰っている為、彼女に接触する事は普通に出た。「何の意味があるのか」と聞かれた時、言い訳に「混じりについて詳しく知りたいから」というのはちよつと厳しかった気がする。一応その後、ウイリアムと相性良いなら頭も良さそうとか色々付け加えたけど、結構苦しかった気がする。ただそれが良かった

たのか、何とか納得はしてくれた。……というよりは俺を通しても大した問題にはならないだろうと判断されただけだろう。この損得や問題の有無で判断するところは何とか把握できてきたけど、何故いつもその考え方なのかは相変わらず分からない。

「あなた、エルフに危害をくわえる気一切無いでしょう?」

「はい、仰るとおりです」

俺は話の種にと思い、ここに来る時の事を簡単に話してみた結果、目の前の女性ウイリアムの妻であるクリスは意図も容易く看破した。

病弱なものも納得な細い体つき、俺達と似た部分を探す方が難しい人間に近い風貌、けど赤く長い髪の下にある表情をあまり揺るがせない顔は中々美人さん。一目惚れ説もあながち間違っていないんじゃないかと、ウイリアムにあるまじき事を考えてしまった。

けど彼女は頭の回転が中々早くて俺の抱いてた疑問を一瞬で解き、解説までやってくれた。

「あの人はエルフの事を考えて動き続けている。もしも少しでも障害が起きる事があると予測したら彼はとづくに防いでる。でもあなたが私の下に行かせた、という事は決してそうはならないと判断したと見てほとんど間違いない。そこから推測してみただけど、合ってるかしら?」

「正解です、奥方殿。俺、じゃなくて私は彼の不利益になる事はもちろん、エルフ達のマイナスになる事はしないと決めてますので。……分かりやすかったですでしょうか?」

「あなたが憶測をたくさん言ってくれたからね。それから言いづらいなら無理に敬語は使わなくていいよ」

「……ありがとう。ウイリアムの奥さんに無礼な真似はしたくなかったんだけど、慣れない口調はちよつと大変だったんだ」

許可を貰ったので口調を戻す俺。仕事の都合上、色々出る機会は多いから敬語できないわけじゃないけど堅苦しいから苦手だったんだ。ただこれがあるか無いかで相手への受けは変わるし、俺達の英雄で王様の奥さんが相手なので自分から使ってたんだが幸いな事にその辺を気にしない人ようだ。

すると向こうは俺の態度を見て、何か疑問が湧いたらしく一つ尋ねてきた。

「ねえ、もしかしてあなた、ハーフエルフの事、嫌っていない？」

「ああ。あなた達の半分は俺達と同じエルフで今は共に戦う仲間だからな」

この思考は変化を嫌うエルフの中で少数派と言われている。半分とはいえ同じエルフの血を受け継いだ者を仲間として見たいし、俺が無意味に誰かを傷つけるのが嫌いなのが理由なんだがこの辺を正直に言うと友人達からも否定多めの賛否両論を良く受ける。

クリスは表情をほとんど変えなかったけど彼女の中で腑に落ちたのか、それ以上の追求はしてこなかった。……メディアから俺の事を聞いていたのだろうか。

さてと、俺はここで本題に入る事にした。短い僅かな時間を雑談で潰すのも悪くないけど、それで一番の好奇心を潰すのは勿体無い。

「あのさ、クリス。あなたとウィリアムはどういう理由で結婚したのか聞いてもいいかな？ あいつこそハーフエルフより純粋なエルフを妻に選びそうだと思うってたから気になってさ。……一目惚れとかそういうの？」

「違うよ。森の少数派を仲間にしたかったのが理由。私を選んだのは彼にとつて一番都合が良かったから」

無いだろうなと思いつながらの質問は予想通りすぐ否定され、逆に俺では決して思い浮かばないだろうがウィリアムならば納得が行く愛が欠片も見当たらない答えが返ってきた。

何もかもが手段になっていくエルフの英雄にある意味感心していたら、クリスから尋ねられた。

「彼にも聞いたの？」

「愛してるかと聞いたなら『分からない』って言われたよ。そのまますぐ仕事の話に変わったからそれ以上は聞いてない」

「そう。彼らしい」

彼女は怒る事も悲しむ事もなく、普通に受け止めていた。それが少し引つかかった。

話を聞く限り打算と政治的な目的しかない結婚で、選ばれたのもウイリアムの都合でしかなく、愛してるかどうか分からない、と聞いたのに、彼女の態度はどうも可笑しい。諦めているのかと思ったが、それも違う。俺をきちんと観察していて、投げやりな態度は一切無い。寧ろその逆で、俺と話しているクリスから感じるのは、俺達エルフよりも今ここに生きている者であるという妙な印象だった。

だからなのか、俺は思わず普段の俺からは考えられないような事を確認を彼女にしたんだ。

「……もしかしてウイリアムはあなたの事をとても愛している?」

一瞬、クリスが驚いた顔をした。初対面の男にウイリアムの事でこんな指摘をされるなんて思っていないなかつたんだろう。俺だってこんな事頭に出てくるなんて思わなかつた。

「どうしてそう思つたの?」

「クリスを見てたら自然と出てきた。……あんな理由で結婚したにしては、あなたはあまりにも堂々としていて余裕がある。そういう心の余裕は誰かに愛されていないと生まれえないものだから、もしかしてと思つたんだ」

そう言いながらも俺の中では半信半疑ではあつた。彼女だけ見れば納得はいくのだけど、相手はあのウイリアムだ。エルフの為に何でもやっていくあの英雄が、安易にハーフェルフを愛するような男とは思えなかつた。

もしも俺が彼女の立場なら、道具みたいな扱いにとづくにキレているか泣いている。でも彼女はどちらでもなかつたし、『分からない』というウイリアムの返事にも予想通りといった態度を見せた。それは少なくともあいつの事を分かつてないし、出てこないし、分かつてたとしても何かしらの確信が無ければ不安になるものなのに微塵もそんな心配は無かつた。

だから気づきにくいだけで、彼女とあいつは本当は凄く愛し合つてる夫婦じゃないかと思つたんだ。

「彼には言わないでね。色々考えてしまうだろうから」

彼女からの口止め依頼で、俺の推測は当たつたと理解する。

……言わないでほしいというのは何時死ぬか分からない病弱さが理由なのかどうかは分からない。ただ、態度にあまり見せないが自然と素直に夫の事が出る辺り、彼女の愛が如何に綺麗かは分かった。

「それは構わないけど、いいのか？」

「ええ。もう証はもらったから」

愛おしそうに腹部を撫でている彼女。その仕草だけで俺の質問はかなり無粋の代物だったと理解した。こんなとびっきりの愛の証、思い合っていないと残せない。

それを見ていたらなんだか俺は嬉しくなって、つい笑みがこぼれてしまった。クリスは唐突に感じたように尋ねてきた。

「急に笑って、どうしたの」

「いや、とても良い事を知れたなと思ったんだ。あなたもあいつも愛し合っているんだな」

「……ありがとう」

思ったままに言うとな彼女は礼を口にする。分かりやすく赤くなつたわけではないが、少し柔らかく嬉しそうな声になつていた事でこのささやかな言葉がどれほど嬉しかったのか察するのは容易かった。美人のこういう顔は悪くない。ウィリアムは未永く爆発しろ。

当初の目的も達成したし、そろそろ仕事を与えられそうなので俺はお暇する事にした。

部屋から出ようとしたところで彼女に呼び止められた。

「リンク。最後に一つだけ質問していい？」

「何だ？」

「あなたから見たウィリアムを教えてください」

何だ、そんな事か。お安い御用だ。俺は彼女に振り返ると、自信を持ってあの英雄の事を伝える。

「俺達の未来を誰よりも考えているエルフの英雄だ。あんたの旦那さんのおかげで俺達もハーフエルフ達も綺麗な明日を目指していける。少なくとも俺はあいつの味方で居続けたいと思っっているよ」

あいつは俺達エルフを纏め上げ、ハーフエルフ達も仲間に加えて、目まぐるしい勢いで進んでいっている。

今はまだ大した成果を見せていないけれどあの手腕と行動力、そして今後の予測を立てれる思考は大したものだし、少しずつだがあいつのおかげでエルフにとって良い方向に進み出しているのは分かる。

何を考えているのかは分からないがあいつについていけば最悪を回避できる事だけは分かった。そしてそれは遠い未来ではないのもなんとなく思えたから、俺はあいつについていって力になるのだと決めたんだ。

俺が誇らしげに笑って言うとな彼女は先ほどと大して変わらないクールな様子で、こう言った。

「そっか。……がんばってね」

「ああ」

応援をそのまま素直に受け取った俺は部屋から立ち去る。

この時の俺は良く分からない男の唯一分かったところを知って有頂天になっていた部分がある。それに元々頭を動かす作業は得意じゃないし、必要以上につっこむのも好きじゃない。だから俺の中でクリスとの会話はここで終わっていた。

「本当に向いてない」

故に去り際、扉を閉める直前に聞こえた彼女の独り言は俺の耳には届かなかった。

昔に比べるとはるかに少なくなった休憩時間。一度きりの邂逅を思い出して笑っていると、同じく休憩を取っていたメディアが眉をひそめた。

「何をニヤニヤしているのよ、リンク。仕事のしすぎで頭狂った？」

「違う違う。ちよっとクリスと会った時の事、思い出してた」

俺がクリスと対話できたのはあの時の一回きり。彼女は子供を産んで、間も無く亡くなった。その子供は誰も知らない遠くへと捨てられた。その存在を知る者は数少なく、ウィリアムも己の子を追いかける素振りはない。

その数少ない存在を知る者同士であるメディアが相手なので、俺は隠す事無く背伸びしながら話す。

「今凄くしんどいけどさ、どつかであの二人の子供が生きてたらいいなーと思つて気合入れてたんだ。どうせすぐ働かされるから気分転換に想像してた」

「どう考えるかはあなたの勝手だけど……凄く入れ込んでるわね。あなたの子供じゃないでしょうに」

「ああ。けど我等が英雄の子供だ。愛さない理由が無い。それにそう考える方が、何か嬉しいだろう?」

元々俺はエルフの仲間や女子供を守る為に戦う事を決めた身。その中にある二人の子供が入るのは俺にとって当然の事だ。

この乾いた戦争時代では楽観的にも程があるかもしれないけど、ささやかな空想は俺にとっては良い活力となる。

「俺の頑張りが少しでも早く戦争を終わらせるものになればさ、未来の子供達は平和に生きられる。ウィリアムの子供も例外じゃなくて、もしそうになったら親子の感動の再会とか出来るかもしれない。ほら、頑張る気力になる」

「……その単純さ、別けてほしいわ」

「お前が馬鹿になったら大変なので断る」

呆れ返ったメディアの皮肉は正面から断った。そしたらため息をつかれた。……彼女の方がウィリアムに近いとはいえ、そこまで変な事言つただろうか。種族の未来と言つたらそういうものだと思うんだけど。

「でもさ、流石のあいっでも自分の子供と再会できたら良い笑顔を浮かべて凄く喜ぶんじゃないか?」

「彼がすると本気で思ってるの?」

「……思ってたけど、メディアの中じゃ無い?」

「無いというより想像できないわ」

「……確かに」

試しに満面の笑みを浮かべたウィリアムを想像しようとしたら、何かすっごいあくどい事を考えてるウィリアムしか頭に出てこなかった。

まあ、でももしかしたら見れるかもしれないので、この想像はその

時に上書きできる事を祈ろう。

こんな時代だ。愛しい人との子供と再会できたら流石のあいつでも、凄く嬉しい事になるだろうから。

俺はそんな未来になるよう、戦おう。

帽子を被った子供が後ろから邪竜の首に短刀を突き刺す、これで九体目。

その時、仲間の死骸を踏みつけながら突撃してくる十体目の邪竜の懐へと髪の毛の長い子供が飛び込む。邪竜がそれに気づいた時には、既に胸に短刀を突き刺されて絶命していた。

慣れた様子で短刀を引き抜きながら髪の毛の長い子供は辺りを見渡し、気配を探る。辺りには静けさだけがあり、これ以上の脅威は感じない。もう安全だと判断した長髪の子供はホツとしたように一息ついた。

「この辺りのは大体片付いたね。前田、大丈夫だった？」

「はい、乱兄さん。兵士級だけだったのが幸いでした」

前田と呼ばれた帽子の子供は、顔についた返り血をぬぐいながら兄である乱に頷く。お互いに傷はほとんど無いのを確認し、安堵する。このぐらいの敵ならばどうにかできるけれども油断が出来ないのも確か。何しろ今は兄弟二人しかいないから尚更だ。

それに二人が今いるのは人里離れたところで、道に迷ってしまった為に帰り道も把握できていない。おまけに戦闘していたせいで日がすっかり暮れてしまっている。

「だけどこんな事は慣れっこの為、二人は慣れた様子で野宿の場所を探そうと話す。」

「それじゃ二人つきりで寝られる場所を探そうか」

「分かりました。邪竜の気配に気をつけて探しましょう。幸い食料の備蓄はまだ残っていますから、そちらの心配はいりません」

「余分めに買って正解だったね。安く売ってくれたあのおじさんに感謝しなきゃ！」

前に立ち寄った村で食料を売ってくれたおじさんの事を思い出し、にっこり笑って喜ぶ乱。

そう話す兄の姿を見て、前田も当時の事を思い返す。可愛らしいフリルがついたミニスカートを違和感一切無く着こなし、腰まで伸ばし

た金色の髪を揺らし、愛らしい顔立ちで上目遣いで子供と女の合間ぐらいの雰囲気、安く売ってほしいと強請る愛らしい少女の姿にしか見えない我が兄の値切っていた光景を。

「……あの人、絶対兄さんが男だつて気づいてませんでしたよね？」

「そこは気にしたらダメ・メ・だ・よ？」

前田の疑問に乱は人差し指を自身の唇にあてながら、気にするな、と告げるのだった。

これ以上口にしたら喧嘩になると前田は悟り、追及することをやめる。自分が気づいた時には兄はとつくに手遅れだったから諦めともいえる。

だから話はここで切り上げ、二人は暗い夜道の中、野宿が出来る場所を探して歩き出す。

幼い兄弟がそれぞれ唯一の武器である短刀でしとめた十体の邪竜の死骸を後にして。

前田藤四郎と乱藤四郎の兄弟はかつてある国にて、父と母と四人家族で暮らしていた。

決して裕福な暮らしではなかったがそれなりに幸せではあった。千五百年以上も続いてきた戦争にて紅玉の瞳が作り出した僅かな平和の中、もうじき戦争は本当に終わるのだという話を父から聞いていた二人は無邪気にその時が来ると信じていた。

それまでは体の弱い母を支えたり、国で兵士をしている父の休みに手合わせを願ったりして、過ごしていた。

「二人は強いなあ。どこからやり方を覚えたんだ？」

「んー、なんとなくかな？」

「相手の動きを見てたら、どう動いてどの速さで動くのか分かりますからそれより早く動けば倒せるだろうと思つて動いてみました」

「あ、ボクも同じ！ でも前田、あんなに素早く動けたっけ？」

「そこは魔法を使いました。兄さんに追いつくにはこのぐらいやらないと難しいので」

「だったらボクも次から使おうつと！ 今度は負けないよ！」

「はい、僕も負けません！」

「元氣なのはいいこった。でも……お父さん、とっても自信無くした」
「え、どうして？」

「実の我が子に瞬殺されて、その後は二人の模擬戦を座って見てる事しかできなかつたから……」

「お、お父さんしつかりしてください！」

「そんなに落ち込まないでー!?!」

二人は幼さとは裏腹に武勇と魔力に恵まれ、優れ、強かった。それこそ自分達よりはるかに大きい体をしていて尚且つ戦闘経験もある父を赤子のようにあっさり倒せるほどだ。

その後、父の勧めで二人は父よりも強い戦士との手合わせを何度か行う事が出来た。相手が変わる度、新たな戦法を覚える事が出来た為に二人はその事を喜んでいた。

兄弟共に小柄で幼い為、使える武器は短刀ぐらいであったものそれは彼等にとつてハンデにはならなかった。寧ろ自らの手足のようにあつさりを使いこなし、如何にして攻撃回数を減らし、勝利を収めるかを極める方向性で育つていった。

二人の戦法は実に良く似ていた。違いをあげるとすれば、二人の自己申告となるが兄の乱が武術に優れ、弟の前田が魔術に優れているそうだ。しかし凡人から見れば、両者共に武術も魔術も常人よりもはるかに凌駕していた。

だから父を含めた戦士達がこの二人がどういう存在なのかすぐに気づく事が出来た。

『乱と前田の兄弟は生まれつきの英雄だ』

この時、幼い兄弟にとつて幸運だった事が複数あった。

一つは乱も前田も幼い子供で、二人とも良い子で自身の力の使い方を理解していた事。

一つはこの頃の国には十分英雄がいるから、慌てて二人を確保する必要が無いという事。

一つはもうすぐ魔剣が破壊される為、長い戦の歴史が終わるから二人が大人になる頃には平和になるだろうと皆が考えていた事。

故にこの事は王の耳に入っていたものの、今対処する事では無いと後回しにされた。幾ら才能があるとはいえども、幼い子供を軍に入れるような非道はこの時、されなかった。

兄弟も自分達が英雄といわれるほどの力を持つてゐる事は知らされたけれど、大人達の良心のおかげで自分達の力を正しく使う事を覚える事に専念できた。

ただし、それは魔剣が折れて人類を滅ぼそうとする三大魔王が出現するまでの短い話だった。

兄弟のいる国は最前線で魔王ジャンヌ・ダルク・オルタの進軍を抑える事になった。国にいたほとんどの英雄が出撃し、戦場で命を散らしていった。

それでも進軍を少しでも抑える為、多くの兵が募られた。使える者は呼ばれていった。乱と前田はそれでも後回しにされていたのだが、父が邪竜との戦いで命を落とし、現実には耐え切れなくなった母が病死した事を切欠に彼等も戦場へと赴いた。

二人は幼かった為、最前線に配置される事は無かった。それでも持ち前の才能を生かし、兵士級や司祭級の命を刈り取っていった。最前線で戦う大人の英雄がとりこぼしたものの、戦意を失って怯える兵士達を襲う邪竜を優先的に選び、少しずつ確実に倒していった。

それでも決して戦況は良くなつたといえなかつた。悪夢は変わらず、終わる気配も見えなかつた。強いて言うならば、無残に消える命ばかりが増えていた。兄弟が気づいた時には、英雄は自分達二人だけになっていた。

「に、逃げる気は無いのかい？」

ある日、兄弟はペンウツド王に呼び出された。人払いされた三人だけの空間で訪ねられた。

おどおどした態度はいつもの事であるが、普段よりもずっと顔色は悪く、以前よりも痩せている王の姿は痛々しい。それでもこの王は残ってしまった幼い英雄の事を気遣っていた。

「ありません。この国は僕らの生まれ故郷で、大事な人達がたくさんいます。そこにいる人々を守る力があるというのに、何故逃げなけ

ればいけないのですか?」

「絶望的な状況なのは分かるけど、赤薔薇王の援軍が来ればどうにかなるかもしれないでしょ? だったらそれまで戦うぐらいならボクらでもできるよ。それにここでないようになって、みんながもつと死んじやう方がやだなあ」

二人はその優しさを受け止めながらも、国を見捨てる気はなかった。

前田も乱も決して楽観的に状況を受け止めているわけではない。自分達が戦っている敵の強さ、圧倒的な力の差、絶望の比率を正しく理解している。前線で多くの英雄達が死んでいったことも、殺された兵士達の中には父がいた事も理解している。

彼等は引こうと考えない。ここには守るべき国があり、自分達には弱い人を守るだけの強い力がある。自分達に力の事を教え、正しい使い方を教えてくれたまま散っていった大人達のように戦いたいと願う。例えそれが負け戦だとしても、それが次に繋げられるかもしれないから。

幼い兄弟はこんな絶望的な状況の中にいるというのに、未だに希望の光を消していなかった。

だから目の前にいる王の顔が更に暗くなり、苦渋の表情を浮かべた事に前田は驚いた。

「主君? どうなされました? 気に障ることを口にしてしまいましたか?……?」

「……………ぼうや達は今、何歳だったかな?」

ペンウッドが震える声を必死に絞り出し、尋ねてくる。乱は指で自分の年を確認してから二人分答えた。

「ボクが九歳で前田が七歳だよ」

「そうか、十にもなつてなかったのか。……シンジはそのぐらいの年の頃、赤薔薇王の話を無邪気に何度もねだってたんだ。でも同じ話をすると怒ってね、ほかにもあるだろうって言われて困ったよ。そ、それから計算問題が全部できた時、誇らしげにしてたんだ。あの頃は今よりもとても素直で可愛かったよ」

「シンジ王子、かーわいい！ その時の王子に会って見たかったなあ」
幼い頃のシンジの話聞いた乱は目を輝かせ、当時の彼の事を思い
浮かべて楽しそうに笑う。

一方で前田は唐突にシンジの昔の話を言われても意味が分からず、
首を傾げている。

「でもその話が僕らと関係あるのでしょうか……？」

「あるとも。子供というのは、大人よりも些細な事で喜んで怒って誇
る小さいもので、大人が守らなきゃいけない大事なものなんだ。だ、
だから、君達が邪竜と戦える事が出来るからといって、急ぎ足で英雄
になる必要は無かったんだ。幾ら必要に迫られたとはいえ、子供が戦
に出るのはな、やってほしくなかったんだ」

「王様……」

「も、もちろん今、君達の力が必要であることも、それ以外の手段が無
いから私も命じるしかない状況なのも分かっている。だけど、酷い地
獄に幼い子供を放り込み続けるろくでもない大人にもなりたくない
んだ。だから、逃げる気は無いかと聞いたんだ」

言葉を詰まらせながらも、ペンウツドは目の前にいる子供達に彼に
とって大事な事を伝えた。

現状からして使わなければいけない、だけど人としては嫌だという
彼は王としてどう評価されるのかは二人には分からなかった。ただ
言わなくてよかったことをあえて口にして、子供だから逃げてもいい
のだと教える姿は誠実で、きちんとした大人だというのは分かった。

だから前田と乱は困惑と迷いを隠す事が出来ず、すぐに答える事が
できなかつた。

「気持ち嬉しいのですが、それをしてしまったら国の皆さんが……」

「……乱兄さんはどうですか？」

「ううん、ボクもすぐには言えそうにないかも。王様の気持ち、どつち
も分かるから……。ごめんなさい、王様」

「構わないよ。こちらこそ答えにくいことを聞いてすまない。ただ、
その道もあるという事を頭に入れておいてくれ。それから……」

言葉を区切ると王は幼い兄弟と視線を合わす。目の下にはクマが

できており、疲労がたまった酷い老人の顔であるが二人にとっては大事な王様であり、優しい大人の顔だ。

「君達をそんな風にしてしまった私を許さないでくれ」

前田は不安を隠せないまま、乱は真っ直ぐに、王の心からの後悔を受け止めるしかなかった。

その後はもう遅いから、と二人は家へと帰された。本来ならば王を守らなければいかなかったのかもしれない立場なのだろうが、その判断力を取り戻すほどの冷静さについては未だ未熟だった事とここに来て子供扱いされた事もあって、素直にもう二人しか住んでない家に帰った。

明日に控えている終わらない戦いに備える為、食事と睡眠をとらなければいけないと頭では分かっているものの、二人とも王に言われた事が胸に引っかかってしまっていた。

乱は古びたソファに寝転がった状態のため息をつき、ペンウツドの言葉を口にする。

「……子供だから逃げてもいい、かあ。あんな言い方ずるいよね」

「はい。……幼いこの身が恨めしいです」

向かい側の椅子に座った前田はそう言うとき重く複雑な気持ちのまま、両手を膝の上で強く握り締める。

それでも戦う意欲を失っていない弟の言葉を聞き逃さなかった乱は寝そべったまま確認をする。

「前田は戦うつもりなの？」

「そのつもりです。……負け戦なのは確定だとしても、少しでも多くの人を守るのなら戦いたいです」

「あ、よかった。負け戦は分かってたんだね。勝つ気でいたならゲンコツするところだったよ」

「やめてください、兄さん。そのぐらいの差は僕も分かります」

前田の言葉に乱は安堵する。物騒な事を言われた弟は冷や汗を流しながらも、兄弟の見解が同じである事を共有させる。

二人が投入されたのはかなり後期とはいえども、何度も邪竜と戦ってきたのだ。それでも向こう側の数は減らず、圧倒的な力差によつ

てこちらの兵士の命は散っていて英雄は自分達二人しかない。民も先の見えない悪夢に耐え切れなくなっており、不安と恐怖で苛まれていつているのも何度も見えてきている。

だからこれで勝てるとは思えなかった。精々出来たとして、足止めがギリギリといったところだろう。実際に今行っているのも足止めではないと二人は見ている。

「恐らく赤薔薇王を筆頭に他の国々は僕らが食い止めてる間に兵力を整えたりして今後に備えてるんだと思います。そして主君もその事を理解した上で、魔王を相手にがんばっている。でないと援軍が来ない理由が成立しません」

「ボクもそう思う。この国、大を救うための小になってるよ。それにここで他所の国が援軍を出してくれたとしても、魔王達の強さを考えると死人を増やすだけで終わっちゃう。……うっわあ、詰んでる。そりゃ王様も逃げろっていうよ」

城の中では口にはできない状況分析をして、改めて現状が絶望的である事を思い知る。

ここで自分達を見捨てている赤薔薇王に怒りを抱かないのは、数だけ考えれば彼の判断は間違いでは無いと分かる事と人類の未来の為に命を散らしていったこの国の英雄達の気持ちを知っている事、そして先ほどのペンウッドからの言葉が胸にあるからだ。

だがそれはあくまで自分達二人だけの話であり、他の人も同じように悟っているかどうかは分からない。もし分かっていたとしても、それは希望に繋がっていない可能性のほうが高いだろう。

「これに気づいてる人、どれだけいると思いますか……？」

「少なくともシンジ王子は助けが来ない事に気づいちゃってる。でなきやあんなに荒れてない。酷い八つ当たりしてなきやいいんだけど……」

「心配なのですか？」

「うん。だってボク、シンジ王子好きだもの。恋愛対照的な意味で……ね」

「……………はっ」

兄からのとんでもない告白に前田は自分の耳を疑い、寝そべっている兄の顔を見る。そこには密かに恋する乙女の顔があった。

今の今まで戦争に関する真面目な話をしてきた筈なのに斜め上の回答を出されてしまい、衝撃で頭が追いつけない前田が出来たのは分かりやすい根本的部分へのツッコミだけだった。

「え、えーと……乱兄さんも王子も同じ男ですよ……？」

「前田、恋に性別も年も身分も関係ないんだよ」

迷い無く即答した乱の真剣な顔を見て、前田は顔が引きつる。

両親が気づいた時には普段からの衣服もスカートも筆頭に女物で固めた乱であるが彼の性別は男だ。いくら可愛い女の子にしか見えないといっても、これは前田の兄で男だ。しっかり男の象徴が生えているのを前田はこの目で見た事がある。

だがまさか好きになる相手が女ではなく、男になっているなんて思わなかった。しかもお世辞にも性格が良いとは言えないあのシンジに惚れてるなんて想像すらしていなかった。

衝撃が強すぎて最早固まったような状態の弟を見て、乱はソファから起き上がって惚れた訳について弟が尋ねていないにも関わらず語り出す。

「シンジ王子ね、初めて会った時から今の今までずーっとボクに対してただの子供扱いをずーっとするんだよ？　王子もそれなりに戦えるからボクの方が強いのが分かってる筈なのに、それでも英雄じゃなくて子供と見続けて『戦争は遊び場じゃないんだ、邪魔だから引っ込んでろ』って良く怒るんだよね」

「僕もそれは言われた事があります。しかしあれはほとんど八つ当たりのようなにも思えますが……」

「うん、半分ぐらいは八つ当たりだよ。でもね、こんな状況だつていうのに未だにボク等を子ども扱いするのは普通は無理じゃないかな？　それなのに言えるって事はさ、自分が他人を守らなきゃいけない存在だつていうのを、強く思ってなきゃできない。……だからボクは臆病の癖に意地っ張りだけど、自分の大事なルールは変えない王子様を好きになつたんだ」

愛しい人の行動を推測し、その根っこを思い浮かべる乱は花のように可愛らしい笑みを浮かべている。

前田はシンジの事を好んでいないが、乱の恋を否定する気にはならなかった。何せ彼の話したシンジの行動は先ほどのペンウッドと全く同じなのだ。

現状、乱と前田の二人を子ども扱いしている者は少なくなってきた。表向きは英雄として頼っているけれど、如何せん幼い子供が邪竜を倒している姿を見ているせいとか、怪物を見る目が増えていた。昔のように才能がある子供として扱う者は先に死んでいる者の方が多い。それでも、と二人は国を守るのならば英雄として扱われる事を受け入れた。怪物として見られていようとも、自分達の生まれ故郷を守ろうと全力を尽くす気でいた。

だけど国のトップである王と王子は、残った英雄を子供扱いし、君達こそ守られるべき存在だと告げ続ける。

その思いこそ尊いものであり、守るべきものだと感じた前田は明日の戦場への固めていく。

「……ここまで王達に思われているのなら、恩に報いたいですね」

「そうだね。でも前田、逃げる事、頭に入れておいた方がいいよ」

「王子はいいのですか!?!」

乱から出てきた思いも寄らぬ忠告に前田は目を丸くする。

驚く弟を気にも留めず、乱は冷静に逃げる事を肯定した理由について話していく。

「国を見捨てたいわけじゃないよ。ボクも前田と同じで最後まで守りたい。そしてそれは王様も王子も同じ考え。……でもね、守り方は一つじゃないんだよ」

「それは、どういう……? 援軍は来ないと見てるのですが、もしかして本当は来るのですか?」

「そうじゃなくて、もつと最悪なもの……かな。ボクとしては凄く当たってほしくないんだけど、そうなった場合は今よりマシな結果になるのは間違いない。でもその場合、ボク等は何もかも置いて逃げないとダメなんだ」

前田には乱の言葉の意味が理解できず、読み取る事も出来なかった。

ただ戦うだけならば前田は兄にも劣らないが、より戦場に適した思考と策略を読み取れと言われた場合兄の方が圧倒的に上なのは知っている。兄もそこは把握しているから普段は前田にも分かるように説明してくれるのだが、今回はどうして意味深な発言を曖昧にぼかしながら伝えるだけ。

不安と困惑が入り混じった表情の弟を見た乱は前田の隣の椅子に座ると彼の手をとり、心配させないように優しい微笑を浮かべる。

「もしそうなっちゃった時はね、ボクが前田を引っ張って走る。だから前田はボクを信じてついてきて」

乱は前田を抱きしめた。

大人に比べたら小さいけれど、前田にとっては少し大きな兄の温もりが心地良くて、前田はそれ以上何も言わず頷いた。

兄が予測した展開が当たってもそれが国を守る事に繋がるのなら、兄を信じようと心から思った。

それは見事に的中した。

——王子が王を殺し、人類の裏切り者になるという最悪の形で。

シンジがペンウツドを殺した時、ジャンヌ・ダルク・オルタの意識がシンジに行った隙について乱と前田は打ち合わせ通り一目散に逃げ出した。振り返る事も止まる事も無く、戦場よりも全力で、敵に悟られないように、兄弟だけで国境目掛けて走っていった。

そして国境付近で待機していたシェオール国の軍勢の下に辿り着いた時、故郷で起きた惨事を即座に伝え、自身の保護を訴えると瞬間に受理され、兄弟はひとまずの安息を得られる事になった。

だが『楽園の東』と呼ばれる事になる祖国を見捨てて逃げてしまった事は前田の心に深い傷を残した。

あの地には守りたいと願った大事な人達がたくさんいた。平和を信じていたのに突如生えてきた悪によって傷つけられた人々こそ逃

がさなければいけなかったのに、先に自分達だけが安心できる場所に逃げてしまった。王子の裏切りを見逃し、魔王の下に残ってきてしまった。

前田は悔しさと悲しみから三日三晩泣き続けた。その度に乱が『まだ終わったわけじゃない』と懸命に励まし続けてくれた。

涙が漸く止まった四日目。前田はその日の内に赤薔薇王の下に向かい、戦わせてほしいと願い出た。

「赤薔薇王様、お願いします。どうか僕をあなたの下で働かせてください」

「……理由を聞いてもいいかい、前田藤四郎」

「三大魔王を倒して故郷を救い、もう誰も傷つかない平和を得る為です」

曇り無き真っ直ぐな目で即答する前田の姿は凜としており、まるで輝きを放つ剣を連想させた。

「僕は故郷を見捨ててしまった事を後悔しています。幾らそれが最良だったと兄に言われても、僕は納得できませんでした。どんな形になるとしても、守りたい人々を見捨ててしまった事は覆せない事実だからです。それを『仕方なかった』という言葉で片付けてしまったら、僕は一生後悔すると思います」

「……なら、復讐の為に戦うと?」

「否定はできません。ですがそればかりを目的にしてしまったらペンウッド王の想いを踏みにじる事になります。あのお方はどうしようもない状況に追い込まれていたのにそれでも僕と兄に子供であつてほしいと願える優しく強い主君でした。主君だけではありません、国の人々も僕ら兄弟を大事にしてくれました。……そのおかげで生きる事ができた僕が、子供である事を捨ててしまったら大人達を悲しませる事になります」

前田は自身が幼い子供であつたから兄と共に生き残る事が出来たのを知っている。大人達がそうして自分達を守り、愛してくれた事も良く知っている。だから怒りに身を任せず、悲しみに溺れず、ここまですべて自分達を守ってきてくれた人々の思いに応えたいと純粹に思えた。

「だから僕はその恩に報いる為に、世界に平和を取り戻そうと決めたのです」

多くの大人の優しさと愛を受けた幼い子供は、純真ながらも勇ましく堂々と決意を告げる。

その姿は小柄で小さいというのに、内にある心は正しく英雄だったとその場にいた兵士達は後に語る。

そうして前田藤四郎はシェオール国に仕える英雄となった。

後に話を聞きつけた乱藤四郎も急いで赤薔薇王の下に駆け込み、同じく英雄となった。

それから二人は持ち前の才能が生かされる指令をこなす日々を過ごしている。

今回の二人旅も新たに発見された人型の邪竜がどの範囲で活動しているかの調査であり、適時報告する事になっている。

「……以上、この範囲で確認できたのは従来の邪竜のみで人型は見つかりませんでした。明日、南方向を調査し終え次第帰還します」

前田は魔術を使った念話を通して、今日一日の報告を終える。

その様子を見ていた乱は軽く拍手を送りながら、前田の事を褒める。

「何の道具も無しに、超遠距離念話できちゃうのはほんとと凄いよねー。さっすがボクの弟！」

「乱兄さんだって出来るじゃないですか。それなのに僕にばっかやらせて……」

「こういう魔法を使った連絡は前田のが得意分野じゃん。それにボクはここを見つけたっていう成果があるからねー」

「全く……」

小言を軽く聞き流しながら、乱は古く硬い木のベッドに腰掛けた状態で自慢げに笑う。前田はそんな兄に苦笑をこぼす。

二人が今いるのは無人の古い木の小屋だ。散々歩き回って深夜に入りだした頃に乱がこの小屋を見つけ出し、二人はそこで一夜を過ごす事にしたのだ。

防御結界を張った後、本国への定期連絡もたった今終えたので後は明日に備えて寝るだけだ。

「明日の任務、さっさと終わらせて帰りたいな。お肌が荒れちゃう」「真面目にやらないと怒られますよ」

「もー、このぐらいいいじゃん。前田こそその年でワーカーホリックになったら、将来大変だよ？ 反動でどっかの賢老柱みたいに女性にお金貢ぐ為に王様にお金おねだりする人になっちゃっても知らないんだからね」

「そんな極論言われても僕には分かりません。さっ、明日も早いので寝ましょう」

「はいはい。それじゃ一緒に寝よっか」

「はい、乱兄さん」

二人は軽い会話をかわしながら、一つしかない木のベッドに揃って横になる。

お互いの温もりを感じながら目を閉じ、幼い兄弟は眠りにつく。

今日、明日と自分達の働きを積み重ねていく事で、故郷と世界を救える事を胸に秘めながら。

魔剣と英雄と多種多様の人によってどうしようもなく翻弄され、千五百年もの戦争の月日ばかりが流れるこの大陸にも娯楽は存在する。歌、本、ギャンブル、決闘、などなどと例を上げれば山のように出てくる。

そういった娯楽の中の物語から通して歴史や英雄を知る、というのも良くある話である。そしてどんな年齢層であれ、物語に触れることは自由であると乱は考えている。ただし、それは自身の興味がある時限定だと、意気揚々と今日見てきたばかりの演劇を語る弟に付き合いながら心底思った。

「——という感じで、三代目魔王ブーディカを題材にした演劇はとんでもない悲劇しかありませんでした！」

「眠らずに最後まで見たのに感心するよ……」

重苦しく悲哀に満ちていて、尚且つ誰が正義で誰が悪なのか分からない心底暗くて救いの無い絶滅戦争を題材にした演劇の感想を笑顔で告げる弟に兄は顔を引きつらせる。

前田は素直で真面目でしっかり者と幼いながらとても良い子と乱にとつても自慢の弟なのだが、如何せん娯楽に触れる機会が少なかつた事と幼い英雄と言われ続けて来たせいとか、かつての英雄や魔王に関わる話になると年相応の子供かそれ以上の知りたがりとなる。

熱中できる趣味があるのは悪い事じゃないと思うのだが、如何せん自分達兄弟は国の諜報員として働いているのでお金があり、幼い弟一人でも大人向けの演劇に入れるぐらいの余裕はある。そのせいでこうして乱にとつて興味のない話題に付き合わされるのは正直きつい。

乱のうんざりした様子を見た前田は不思議そうに尋ねる。

「兄さんは興味がありませんか？」

「うーん、恋愛系ならともかくバッドエンド確定で重すぎて胃が乱れちゃう魔王系歴史の話はちよつと……前田は何で平気なの？」

「今となつては昔の話ですし、時代背景を知れたならそこから新しい

知識の発展に繋がりますから。それにお話と割り切って見れば、どれもこれも深いものばかりですよ?」

「前田、ボクより年下だよな? それならさ、ふなっしーとかに興味持たない? 時々玉座でふんぞり返ってるアレの謎を解明しようと思わない?」

子供にあるまじき研究者のような視点を持ち出した弟を危惧して、乱は他のものにとたまに城の中で見かける謎の物体を例に挙げる。

しかし前田は難しい顔を浮かべて首を横に振る。

「いえ、魔法で分析をやってるのですが……ただ着ぐるみだけがあるパターンと中身を解読しようにも何かに妨害されて見えないパターンのどっちかにしかならないのです……」

「前田の魔法を妨害できる人って一人しか思い浮かばないんだけど」

「あの方の尊敬を自分の手で崩したくないので、そこは思考停止します」

「それ、答え言ってるようなものだよ」

そもそも玉座に置いてある時点で、中の人が誰なのかお察しというものである。

かの人の趣味なのかどうかは知らないが、きっとこれは知らない方がいいものだろうと前田の思考停止を見習って乱も深く考えない事にした。

それよりも、と前田が乱の好みを反映してか別の話題を取り出した。

「ところで兄さん、コイバナが好きだと仰いましたがそれならガトリング斎とディアーチェのお話はどうでしょうか」

「あ、その二人知ってる。千年前にいた十二英傑で同盟国のトップ同士でしょ? え、何、恋人同士だったの!?!」

「そうなる前に初代魔王に殺されてますが、奇跡的に残された資料と歴代の学者の研究成果によると平和だった場合、そうなる可能性は大いにあったと言われています。主にディアーチェサイドからの激しいアプローチによって」

「前半部分はいらなかったよ! でも詳しく!!」

どうあがいても絶望な結末を冒頭に告げられたのに凹みながらも、過去の英雄同士の恋は気になるので乱は食いつく。

しかし直後に告げられたのは甘酸っぱいものではなく、プライバシーも何も無いある意味残酷な現実であった。

「ディアーチェ及びにその姉達を知恵を出し合って書いただろうラブレターの山が見つかって、試行錯誤を凄くしていた形跡や、年齢とは不相応の行動を考えていたような肉食系の文章が確認できたんですよ！」

「見なかった事にしてあげようよ、それ!? どう考えてもそのラブレター、未来人が見ていいものじゃないよ!? 歴史的価値あっても話題にしちゃダメじゃないかなあ!?!」

「大丈夫です。本人たちはとつくの昔に死んでますし、赤薔薇王もアルマイルさんも千年前の当事者とはいえどもこのお二人との関係は薄かったと聞いております! それにこういうものほど演劇とか歌とか本にされやすいですし……」

「いたたまれなくなってきたから他の人! 他の人を教えて!!」

「他ですか……。それなら初代魔王の父が残した日記で判明したものがあります」

「あ、その人知ってる。戦争泥沼化させた原因作っちゃった大英雄の片割れのアーサー・ペンドラゴンだね? え、何。禁断の恋でもあったの……?」

「いえ、家族仲は極めて全員良好。寧ろモードレッドに好意を向けているハザマという人があまりにヘタレだと何度も日記に書いていました。そして魔王化する前のモードレッドとハザマは資料が共に足りない為、初代魔王関係の物語の格好の餌食になってます」

「さっきも思ったけど現代人、無節操すぎるよ!? 餌食ってどんな感じなの!?!」

「凄いですよー、白馬の王子様パターン、ロリコンパターン、逆プロポーズパターン、と種類が実に豊富。演劇マニアの冒険者から聞いたところ、あの二人に関しては脚本の人の性格がもつとも出る人物だと仰ってました」

「……性格が出るって例えば？」

「歴史に忠実になってるものもあれば、片や切なさいっぱい悲恋物語になってたり、片やハザマがアーサー・ペンドラゴンの策でモードレッドの婿にされてたり、と多いですよ。学者の方々からは賛否両論ですけど、ファンの方々からは色んな視点があって楽しいと……」

「とりあえず三つ目のはあまりにハザマ情けくない？ もうちよつとこう男っぽくしてあげよう？」

「偶々同じ演劇を見た学者さんに聞いたところハザマのヘタレっぷりのところと手段選ばないアーサーのところは史実に近かったそうです」

「それで史実に近いって鬼なの、アーサー。……ちなみに史実ではどうだったの？」

「ハザマ、初代魔王の復讐騎モードレッドに殺されたのが最有力説です」

「分かってた！ 初代魔王関係の時点でロマンなんて無いの分かってた!! 他に救いのあるカップルは無いの!?!」

「あ、なら救いというか今でも続いているお方関係が一つあります。カリオストロとアインズ・ウール・ゴウンについて乱兄さんは知っていますか？」

「どっちも十二英傑でほぼ不老不死である凄い人達というのは知っている。え、でもアインズって骸骨じゃなかったっけ……?」

「ああ、この二人は子孫と先祖……要するにおじいちゃん和孫の関係なんです。孫側であるカリオストロにはエドワード・エルリックというお相手がきちんといました。それを踏まえた上で、アインズ・ウール・ゴウンの名前を出したんです」

「え、何。わしの孫が欲しかったらわしの屍を乗り越えていけ、ってやったの?」

「違います。寧ろ逆で、お孫さんに恋人が出来た事にすごいウキウキだったそうですよ。その記録がバッチリ残っているんです、それもとつても具体的に」

「ああ、やつとまともな恋愛話きたー！ 具体的に残すなんてその

二人ってそんなにラブラブだったの?」

「アインズ・ウール・ゴウンがエドワードとカリオストロの様子をこっそり覗き見していた記録なんです」

「……………は?」

「今の乱兄さんのように孫のコイバナにウキウキになったアインズは頻繁にデバガメしてたそうで発見された複数の日誌の大半は二人の恋模様でビッシリだったようですよ。カリオストロ側も見られるのは嫌がってましたけど完全に拒絶したわけではないのも当時の弟子が残した記録で裏づけされています。流石に細かい部分は覚えてませんけど、この辺の概要は調べれば結構出てきやすいですよ」

「おじいちゃん、孫のプライベート優先してあげようよ。孫ももっと頑張って拒否してよかったと思うよ」

「ちなみにこの日誌、発見当時は凄く嚴重封印されてたもので当時の赤薔薇王と学者達は魔剣に纏わる記録があるんじゃないかと封印解除に二十年以上の長い月日かけたそうです。その努力は無事に実ったのですが、肝心の中身が孫カツプル観察日記と知った時の王のなんともいえない顔は表現できない、と当時の学者さんの記録にありました」

「おじいちゃん、もつとちゃんと封印するものあったよねー!」

「でも恋愛の記録がある事と当時の学者さんはエドワード・エルリックの子孫だそうなので、先に出した二組に比べれば救いがありますよ!」

「赤薔薇王のあまりの不憫さにロマンスどつか行っちゃったよ!!」

ロマンスの欠片も見当たらない、どちらかというと歴史家や脚本家の視点から見た裏話に乱のツツコミは止まらなかった。

前田は歴史そのものを知るのが楽しい為か生き生きと語ってくれてるが、乱からすれば赤裸々なプライベート話の嵐にかつての英雄達に同情を覚えるばかりであった。昔の英雄のロマンスを望んでいたはずなのに蓋を開けてみれば、斜め下の話ばかりが未来人に知れ渡ってるってどんな拷問なんだろう。

とりあえず人類の為に魔剣研究に頑張ってたのに空振りさせら

れた不運な赤薔薇王には今度何か送ろうと硬く心に決めた乱であつた。